

七曲がり Q&A

Q. 七曲がりの町はいつできたの？

A. 彦根城と城下町の建設が始まったのは1604年ですが、現在「七曲がり」と呼ばれている町ができたのは、城下町が拡大された寛永年間(1624～44)です。城下町と中山道の高宮宿をつなぐ道(彦根道)の一部で、道路が何度も折れ曲がっています。

Q. 町名はどのように変わったの？

A. 城下町の中では新しい町なので、かつては七曲がり全体を指して「新町通り」「新町筋」と呼んでいました。彦根口駅が明治34年に開業した当時、新町駅だったのはそのためです。昭和12年に彦根市が誕生したとき、青波村の岡(旧岡村)が岡町になったため、それまでの岡町は元岡町に改称しました。同様に、青波村後三条(旧後三条村)が後三条町となり、それまでの後三条町は新町通り後三条町に変わり、昭和26年に新町となりました。

Q. 彦根仏壇の課題と新しい取り組みは？

A. 彦根仏壇は地場産業として発展してきましたが、仏壇のない住宅が増えて需要が減っていることや、職人の後継者不足などの課題を抱えています。そこで、若手の事業者が中心になり、現代の生活に溶け込む新しい仏壇・仏具が開発されています。また、食器づくりや甲冑の製作など、職人の技を仏壇以外の分野に応用する試みも進められています。

Q. なぜ仏壇が作られるようになったの？

A. 彦根仏壇の製造がいつどのようにして始まったのか、はっきりしたことは不明です。武器を作っていた職人が平和な時代になって転向したといわれますが、確証はありません。吉田醤油(地図⑪)の先祖「塗師屋(ぬしや)十兵衛」が彦根で最古の仏壇屋といわれ、たんすの製造から転業したと伝えられています。様々な伝承を総合すると、江戸時代中期に仏壇の製造が始まり、後期に盛んになったようです。仏壇が庶民に普及するのは江戸時代中期以降のことで、他業種から転業した新興産業が、城下のはずれの新しい町である七曲がりに定着したということでしょう。

Q. 仏壇はどのように作られるの？

A. 「工部七職」と呼ばれる7種類の専門の職人が部品を作り(写真)、最後に仏壇問屋が組み立てて完成です。から職人へと移動させながら作るため、職人が集まって住むようになったと考えられます。

工部七職

写真提供：彦根仏壇事業協同組合



木地(きじ)



宮殿(くうでん)



彫刻(ちょうこく)



銚金具(かざりかなぐ)



漆塗(うるしぬり)



蒔絵(まきえ)



金箔押(きんぱくおし)

七曲がりエリアへのアクセス



JR・近江鉄道 彦根駅から徒歩約20分
近江鉄道 ひこね彦根口駅下車すぐ

2014年3月16日 初版発行
2016年10月9日 第2版発行

制作 まち遺産ネットひこね http://www.geocities.jp/machiisan_hikone/
(文・写真 鈴木達也)

参考文献

『新修彦根市史 第10巻 景観編』(彦根市、2011年) / 『新修彦根市史 第11巻 民俗編』(彦根市、2012年)
『新修彦根市史 第12巻 便覧・年表』(彦根市、2013年) / 彦根史談会編『城下町彦根—街道と町並—』(サンライズ出版、2002年)
彦根景観フォーラム『世界の城下町彦根をめざして』(2006年) / 後三条「かたりべ」の会『後三条今昔ものがたり』(1993年)
彦根市地歴グループ『ひこねの歴史を歩く』(2007年) / 『彦根 明治の古地図 三』(彦根市、2003年)

このマップの第2版は、彦根市のひこね市民活動促進助成金を受けて制作しました。「御城下惣絵図」は、彦根城博物館の許可を得て掲載しています。作成にあたり、滋賀県立大学の濱崎一志教授、彦根市教育委員会の小林隆さん、そして地域の皆様のご協力を賜りました。心より御礼申し上げます。



ひこね hikone nanamagari map 七曲がりマップ

古地図で楽しむまち歩き

ぶらひこねマップ コース 4

彦根城下町と中山道を結ぶ七曲がりは、伝統工芸・彦根仏壇のお店が並ぶ、職人の技が光るまちです。江戸時代から変わらない町並み、風情ある路地、歴史を語る寺社など、みどころがいっぱい！ 江戸時代の古地図「御城下惣絵図」を持って七曲がりを散策し、ゆったりとした時の流れを感じてみませんか？



写真提供：彦根仏壇事業協同組合



芹橋

江戸時代の彦根城下町では、芹川に架かる唯一の橋だった。現在の橋は1970年に架け替えられたもの。



蛭子神社

江戸時代、養春院という真言宗寺院があったが、明治になって廃寺に。境内の南端にあった蛭子神社が取り残され、商売繁盛の神として信仰を集めている。



長久寺

1042年の開基と伝わる。戦国時代に焼失したが、1629年、彦根藩の家老・庵原朝真らが本堂（県指定文化財）を再興。血屋敷で有名なお菊の皿がある。



彦根神社

もとは田中神社。1734年、彦根築城前まで彦根山にあった活津彦根命（彦根の地名の由来）がまつられ、2つの社殿が並ぶようになった。



明専寺

1615年に開かれたと伝わる。明性寺ゆかりの道場だったが、1815年に「明専寺」となる。明治33年、境内を拡張。



西川家住宅

黒漆喰の壁と虫籠窓、袖壁が美しい明治時代初期の町家。間口の大きさは、周辺でも群を抜く。かつては家具を売る商家だった。



後三条川

江戸時代、芹川の堤防に樋を通し、後三条村に引き込まれた人口の川。現在も幾度の改修を経て使われている。



旧佐藤家住宅

昭和9年に建てられた。1階の出窓、2階の袖壁ウダツが特徴で、外観は黒く重厚感がある。内部には座敷のほか、洋室がある。国登録有形文化財。



Takumi Apartment

1836年の建築で、もとは綿や仏具を扱う商家（めん十）だった。現在は改装され、住宅、賃貸アパート、ピストロなどとして生まれ変わった。



吉田家住宅

江戸時代末期の町家。虫籠窓や袖壁、一文字瓦が美しく、気品に溢れている。玄関先には、土戸の痕跡の溝が残っている。



吉田醤油

1831年創業。現在の建物は大正時代のもので、二段重ねの袖壁ウダツが重厚な外観を演出している。レトロな看板に注目。



水路と石垣の路地

路地の両側に板張と漆喰の壁が残る、風情ある空間。水路の南側の町家は、台形の敷地に建てられ、石垣が築かれて周囲より高くなっている。



済福寺

4代藩主井伊直興が建立した黄檗宗の寺院。1807年、11代藩主直中の夢のお告げをきっかけに、高さ6mの延命地藏菩薩（彦根大仏=表紙写真左下）がつくられた。



旧秋口家住宅洋館

大正5年、芹町に建てられた。当初は齒科医院で、2階に診察室や待合室があった。板張の外壁と上げ下げ窓が特徴。2016年、現在地に移築。国登録有形文化財。



新宮道

七曲がりから雨壺山の山裾へ分かれる「新宮道」は、現在の岡町にある新神社まで続く。新神社は、江戸時代には新宮大権現と呼ばれていた。



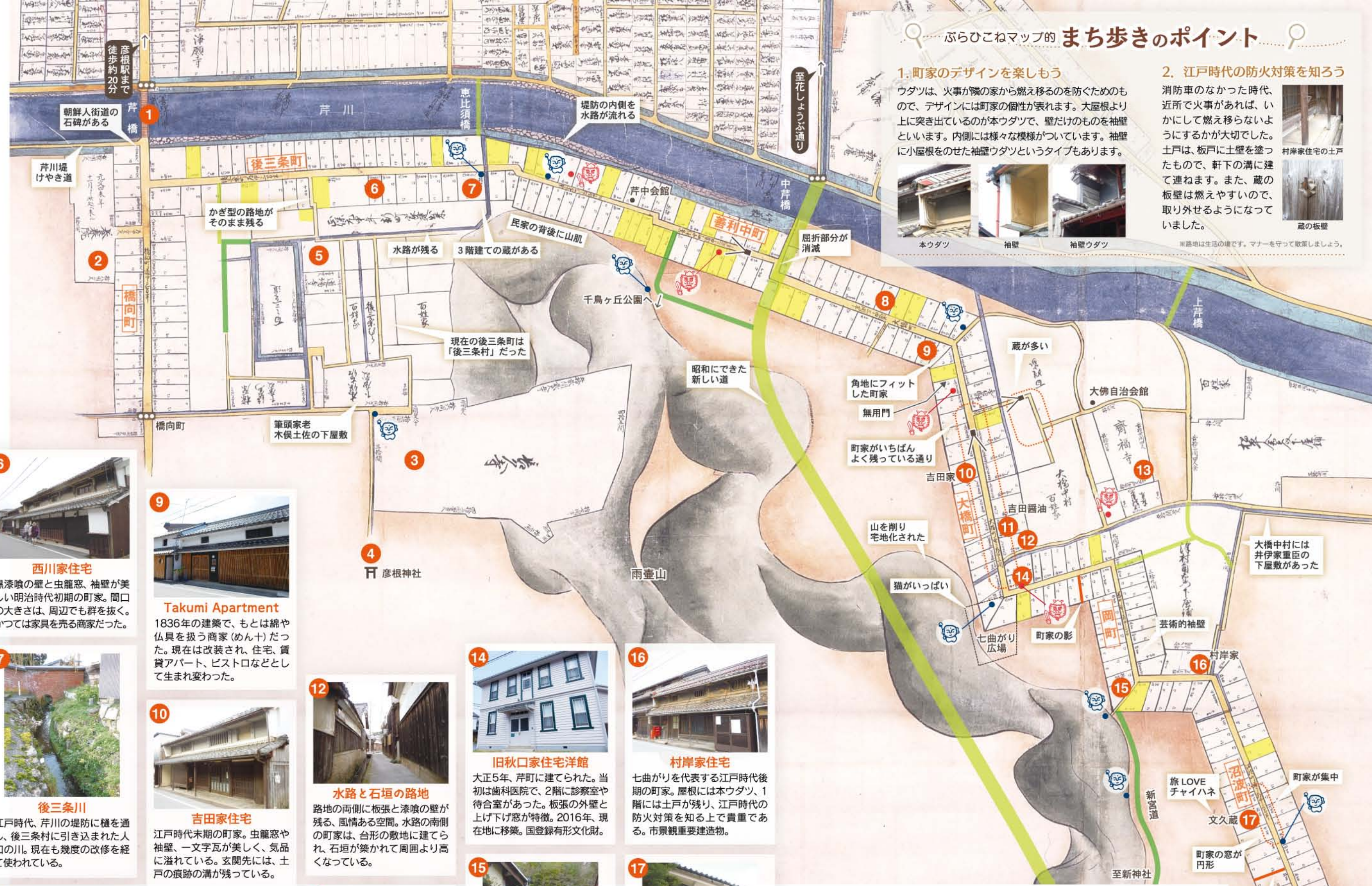
村岸家住宅

七曲がりを代表する江戸時代後期の町家。屋根には本ウダツ、1階には土戸が残り、江戸時代の防火対策を知る上で貴重である。市景観重要建造物。



文久蔵

幕末の文久年間（1861～64）、後に日本生命の創始者を輩出する弘世家が建てた3階建ての蔵。現在は改装されて蕎麦屋になっている。



ぶらひこねマップ的 まち歩きのポイント

- 1. 町家のデザインを楽しもう
- 2. 江戸時代の防火対策を知ろう

ウダツは、火事が隣の家から燃え移るのを防ぐためのもので、デザインには町家の個性が表れます。大屋根より上に突き出ているのが本ウダツで、壁だけのものを袖壁といいます。内側には様々な模様がついています。袖壁に小屋根をのせた袖壁ウダツというタイプもあります。



消防車のなかった時代、近所で火事があれば、いかにして燃え移らないようにするかが大切でした。土戸は、板戸に土壁を塗ったもので、軒下の溝に建て運ねます。また、蔵の板壁は燃えやすいので、取り外せるようになっていました。



※路地は生活の場です。マナーを守って散歩しましょう。

「御城下絵図」とは？

江戸時代の彦根城下町の様子をもっとも詳細に伝える古地図。天保7（1836）年、彦根藩の普請奉行らによって作られました。屋敷の持ち主の名前が書かれているのは武家屋敷や寺院など、書かれていないのは町人の住まいです。道幅や堀幅、屋敷の間口などの寸法まで書かれています。

彦根城博物館所蔵

凡例

- 江戸時代にはなかった道
- 明治時代初期の地図に載っている道
- 後三条町
- 江戸時代の町名
- お地藏さん
- お地藏さんのある建物
- 仏狸関係のお店・工房
- おすすめ撮影スポット

100m

踏切越えてすぐ彦根口駅